

3. 人口動態死亡票による川崎病死亡例の剖検記録について

昭和50～53年の人口動態死亡票に川崎病の記載のあるもの127名のうち剖検記録のあるものについては、すでに過去の班会議にてその概要を示したが、今回昭和54年の死亡票59枚が得られたので昭和50～54年分、計188枚について剖検率の推移(図11)、剖検記録の概要(表3)を示した。

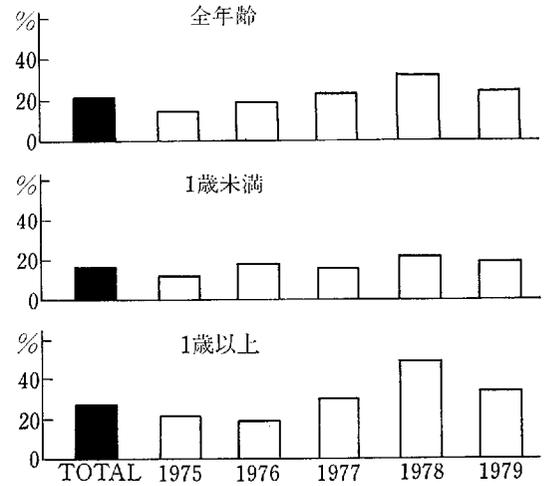


図 11 年次別・年齢別剖検実施率

1980年当院入院患者における冠動脈瘤の 発生頻度およびフローベン治療の検討

日赤医療センター小児科 川 崎 富 作
 菌 部 友 良
 柳 瀬 義 男
 今 田 義 夫
 高 山 順
 沼 尻 志 信

川崎病冠動脈造影における冠動脈病変の出現頻度の報告は数多くあるが、入院患者全例に血管造影を施行することは難かしく、一般には、浅井・草川のスコアが高いなどの、ある程度セレクションされた例に行われてきた。しかし近年心断層エコー図の著しい進歩によって、non-invasive に冠動脈瘤の存在の有無が推定できるようになった。今回われわれはこれを用いて昭和55年度入院患者の冠動脈瘤出現頻度を調べてみた。対象は当院昭和55年度入院患者98例で、その内分けは、男女比1.5:1、年齢分布は最少1カ月から最高18才で、1才前後にピークがみられ、4才以下が80%を占めた。

浅井・草川のスコアの分布は、5点以下が88%、6～8点か9%、9点以上は3%であった。平均治療開始日は約6病日で、無作為に85例にアスピリン(有熱期50mg/kg、その後30mg/kg)を、また13例にフローベン(2～5mg/kg)を投与した。心断層エコー図はアロカSSD-800を用い、最低3回以上検査を行った。心断層エコー図の信頼性をみるために、血管造影前の心断層エコー図所見と血管造影所見を40例(対象患者以外も含む)につき比較してみた。

見おとしては4%位(左冠動脈瘤1例、右冠動脈瘤2例)であり、それらは機械使用になれてなかった初期の頃の

ものであった。また発症1~2カ月で心断層エコー図のどかない部分だけに冠動脈瘤のみられることも稀なので、心断層エコー図による川崎病冠動脈瘤の検出精度は90%以上と推定された。今回の対象例中、心断層エコー図で異常が発見されたのは7例(浅井・草川のスコアはそれぞれ2, 3, 3, 6, 8, 9, 13点であった)で、全例冠動脈造影で冠動脈瘤が確認された(7/98=7%)。心断層エコー図の精度を考えると、昭和55年度入院患者98例(主としてアスピリン療法を受けた)の冠動脈瘤の出現頻度は7~8%と推定された。

治療法の検討としてアスピリン療法とフローベン療法を比較してみた。対象はフローベン治療群(2~5mg/kg投与)25例とアスピリン治療群(有熱期 50mg/kg, そ

の後 30mg/kg 投与)85例計110例であった。これらの例は無作為に振り分けられた。両群の男女比と年齢分布と治療開始日は同じであった。フローベン群の平均発熱期間は11.1日、スコアは4.4で、アスピリン群の8.8日、3点と比較してやや高く、冠動脈瘤の出現頻度(全例心断層エコー図で検査を行った)はフローベン群12%、アスピリン群5%であった。肝障害の出現頻度はフローベン群に低かった。しかしこれらの成績では有意差なく、フローベン群の例数を増して再度検討する必要がある。少数例に凝集能を測定したところ、アスピリン 30mg/kg とフローベン 2mg/kg 投与で凝集能の低下がみられ、フローベン 5mg/kg 投与では著明な低下がみられた。

MCLS 患者における血中インターフェロンの測定成績

日赤医療センター小児科	川	崎	富	作
	柳	瀬	義	男
	高	山		順
	今	田	義	夫
国立予防衛生研究所	山	崎	修	道
	甲	野	礼	作

〔目的〕

MCLS の原因は依然として不明であるが、過去においてなされたウイルス学的検索を再度検討し、未知のウイルスの可能性も追究すべきと考える。今回この観点より MCLS 患者の血中インターフェロンを測定した。

〔材料と方法〕

材料は1980年4月より11月までの約7カ月間に日赤医療センター小児科に入院した MCLS 患者のうち、診断基準を満足する typical な MCLS 患者30例を選び、急性期と回復期のペア血清につき、インターフェロンの力価を測定した。同時に対照群として感染性疾患に罹患していない健康小児10名につき、同様に測定した。方法は FL 細胞—Sindbis virus 系のをを用いて、国際標準のイ

ンターフェロンをレファレンスとしてウイルス CPE 50%抑制法で測定した。

〔結果〕

表に示すごとく、2名の MCLS 患者の回復期血清中にインターフェロンを検出したが、これはこの時期に罹患したウイルス性気道炎のためと考えられた。MCLS 患者の急性期にはインターフェロンおよびインターフェロン誘発因子が検出されることはなかった。しかしながら、この結果は必ずしも MCLS とウイルスとのかわりを否定し去るものではなく、今後とも新しいウイルスの可能性をも含め、別の角度から MCLS の病因を追究してゆく考えである。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



川崎病冠動脈造影における冠動脈病変の出現頻度の報告は数多くあるが、入院患者全例に血管造影を施行することは難かしく一般には、浅井草川のスコアが高いなどの、ある程度セレクションされた例に行われてきた。しかし近年心断層エコー図の著しい進歩によって、noninvasive に冠動脈瘤の存在の有無が推定できるようになった。今回われわれはこれを用いて昭和 55 年度入院患者の冠動脈瘤出現頻度を調べてみた。対象は当院昭和 55 年度入院患者 98 例で、その内分けは、男女比 1.5:1、年齢分布は最少 1 ヶ月から最高 18 才で、1 才前後にピークがみられ、4 才以下が 80%を占めた。